

みき通信



沖縄から神奈川へ

オスプレイは飛んできた・・・そして

日本共産党 町議会議員
くぼたみき 活動報告

第43号 2014年7・8月合併号

発行 **がんばれくぼたみきの会**

連絡先 875-7126 (阿部)

7月15日(火)、配備先の沖縄から米海軍厚木基地に飛来した米海兵隊新型輸送機MV22オスプレイは、開発段階から運用開始後も墜落事故を重ね、安全性への疑問が指摘されてきました。

騒音や事故への不安がある中で、飛行ルートなどの情報を求めても軍事機密として、自治体にさえも具体的な情報は公開されません。

オスプレイのプロペラは、垂直にしたヘリコプターモードと、水平にした固定モードに転換でき、この転換時に事故が多いため「ヘリモードは基地と演習場の上空に限り、転換モードでの飛行時間はできる限り短くする」と日米合意の運用規定があります。でも、ヘリコプターモードの角度を85°以上としているため、実際には空を飛ぶ物体の角度検証は難しく、しかも「運用上、必要な場合を除き」とただし書きがあり、さらに規定違反を立証しにくくしています。要するに、安全策は名目上で、実際は米軍の好きなように運行できるというわけです。

政府は22日(火)には、自衛隊に導入するオスプレイ17機を佐賀空港に配備する計画を示し、沖縄の米海兵隊オスプレイの一時配備も想定しています。

数に物を言わせて秘密保護法を成立させ、世論の不安や反対の声を無視して、強引に集団的自衛権行使容認に走った安倍政権。「国民を守る」「戦争に参加するわけではない」と、何度も口にしていますが、オスプレイ同様保障はありません。

集団的自衛権行使容認の閣議決定当日、数万人の人々が首相官邸前の抗議行動に参加し、一部を除いてメディアは意図的に報道しませんが、その後も新宿や大阪など、各地で抗議行動がひろがっています。

「ウソとごまかしの政治を許さない」と怒りの声を粘り強くあげていきましょう！

私たちのくらしと生命、平和を守るために！

震災復興・さらに難しい障がい者支援 町議会議員 くぼた みき

自治体学校に参加し、大槌町の保健師さんの震災後の復興・地域の方々の生活を支える活動の話を聞きました。

大槌町は、町長をはじめ40人もの職員が犠牲となり、役場や公共施設を失い、行政機関が麻痺したといえます。「保健師とは、住民がより良く生きるために支援する仕事だが、震災後の初仕事は遺体安置所の確保という命を見送る仕事だった。自治体職員も被災者だが、住民の生命を守るため職員自身のモチベーションを保つ努力をした。しかし、時には言いようのない怒りや脱力感に襲われる。災害を経験し、平常時から災害に備える力と体制の構築が課題と反省した。全国から560人もの保健師の支援を受け『保健師さんを待っていた』という住民の声に、今まで築あげた信頼関係、住民の生活を支える職種であったと再確認した。住民の生活再建を考えるうえで重要なのは、住民自らが行動を起こせるよう支援をすること、『生きる意欲と笑顔』を取り戻す支援である」と、何度も声を詰まらせながらも語られました。

分科会では、聴覚障害者は防災無線は聞こえず、ご近所や家族の方に引きずられるように逃げ延びたが、避難所には手話の出来る人はおらず、コミュニケーションが取れない。外見からは聴覚障害は分かりにくく更に自分の居場所がなくなった。など、視覚、聴覚、それぞれの障がい者グループホームの職員のかたが手話を交えて語られました。

福島で「被災地障がい支援センター」を立ち上げ支援を続けている方の、避難所を回り、被災地での障がい者の個人情報保護に阻まれながらも実態調査から始めて、仮設住宅の調査、交流サロンをオープンするなど、一歩ずつ復活の為にみんなで活動してきた話。また、今まで頑張って「育てて売る」と自分たちの仕事にしてきた野菜づくりは、原発事故で放射能に汚染され、畑では作業もできなくなり、障がい者が自立に向け動いていくにも、就労支援・相談が大きな課題だといえます。

東日本大震災から三年半、様々な課題が残され「復興」という言葉は重く、空地だけが残る場所が少なくありません。震災時、障がい者の死亡率は健康者の約二倍。

多くの人語る震災の現状は、コンピューターのシミュレーションではなく現実です。

葉山町も地域防災計画の見直しで、避難経路や避難所も見直されましたが、そこには出てこない問題もあります。語られた現実から私たちは学び、その声を生かしていかななくてはなりません。